東北アジアの旧石器時代における細石器文化の出現と展開
－韓半島を中心に－

大　谷　　薫
財団法人 韓国先史文化研究院　研究員

緒　　言

旧石器時代の一時期を担う細石器文化は、後期旧石器時代から新石器時代にかけて北方地域を中心に世界中で認められ、石器製作技術が最も発達した段階であるといわれている。日本列島内においても広域的に盛行するが、北と南で大きく分かれる二つの特徴的な文化様相が展開している。中でも、東北日本地域に展開する「楔形」細石器文化は広く大陸地域まで分布するのに対し、西南日本地域を中心に広がる「稜柱形」細石器文化は、石器群として展開する地域は旧石器時代では日本列島以外に殆ど類例がない。この二つの細石器文化は、石器形態の相違だけではなく、遺跡分布範囲と共に石器製作の工程と各遺跡における作業単位が全く異なることが想定されている。それは、同じ細石器を用いる文化の中で、石器群の構造すなわち人類の行動形態が異なることを意味している。空間を異にする二つの細石器文化がどのように関連し成立しているのか、両者における共通性と相違性を抽出し、遺跡を連関して行われる石器製作作業のパターンを解析することが必要である。

そのような細石器文化を巡る人類の行動形態は日本列島内だけでは留まらず、大陸における様相とも関係してくることが推察される。その上で重要となってくるのが、最も近接する韓半島との関連性である。 韓半島の細石器文化研究は 1961 年石壯里遺跡において旧石器文化の発見と共に開始されたが、本格的に理解されるようになるのは 1983 年垂楊介遺跡の発掘以来である。垂楊介遺跡では数万点に及ぶ細石器関連資料が出土され、現在においても最大規模の細石器文化の遺跡として知られている。そしてまた当遺跡出土細石器の分析により、部位名称と技術体系の理解及び形式分類が行われ、他遺跡出土の細石刃関連石器との比較と共に、細石器文化研究が本格的に開始されることとなる。また‘剥片尖頭器’という全く製作体系の異なる石器が共伴するという事実も、日本列島とは異なった韓半島独自の石器時代編年の概念を体系化させるものとして注目された。その後、全国的に発掘調査が活発に行われるにつれ細石刃関連石器が出土する遺跡の発見も急増し、ほぼ韓半島全体にその広がりが見とめられることが明らかになる。その結果これまで石器形態に集中してきた研究の傾向に代わり、旧石器文化としての全体的な視野から細石器文化を解釈する観点が生まれてくる。特に剥片尖頭器をはじめ石刃を用いた石器類との関連性に視点が置かれ検討が進められており、韓国研究者の中でも研究の範囲は韓半島を越え大陸地域と日本列島に拡大されてきている。しかし、現在まで韓半島で確認されている細石器文化遺跡は約 50 遺跡余であるが、その殆どが「楔形」細石器石器群であり、日本列島で見られるような稜柱形細石器石器群の展開が未だ確認されていない。しかし僅かながら出土していることも事実であり、二つの細石器文化の存在がみとめられる。またその他、細石器石器群とともに剥片尖頭器を伴う石刃石器群が共伴する遺跡が半数以上を占めて検出され、日本列島とは大きく異なる石器群の様相がうかがえる。

しかし、東北アジアにおいて、旧石器時代の考古資料に関する基礎的な資料データ・分析を含んだ調査報告がなされている遺跡は未だ多くなく、石器群の全体像が不明瞭な場合が殆どである。一方その中でも韓国では、最近頻発している発掘事業により良好な資料が大量に報告されており、東北アジアの旧石器時代研究において欠かせない位置にあるといえる。特に、石器製作が一遺跡において完結するものではなく、複数の遺跡にわたって遂行されるという推察 (安蒜 1977 など) を踏まえると、石器製作・使用・廃棄の一連の作業を通して見られる遺跡間の連関関係を把握する中で、上述のような課題に接近することも可能と思われる。一遺跡から出土する石器群は過去人類の行動形態を示す作業工程の一端を示すものであり、他の石器群との連動のもとで成り立つものであることを常に理解しておかなければならない (大谷

2006・2008)。

本論では韓半島を中心に、現在までに確認された細石器遺跡の構成を整理し、各遺跡において展開された作業工程を解析する事を目的とする。先に述べたように、特徴遺物の技術・形態的分類のみによらず、各遺跡で確認される石器組成・石材構成・共伴遺物を分析対象とし、遺跡の性格を解析する。これにより、遺跡間の差異を石器群の性格として把握し、韓半島における細石器文化の一端を復元したい。

研究の方法

韓半島で確認されている細石器を保有する遺跡は地表採集・発掘調査を含め、全部で 50 箇所を越える。その中で石器・石材組成に注目すると、各遺跡で特徴的な状況が認められる。特に細石核と細石刃の組成を確認すると、一遺跡内において多様な、または単純な石材利用の状況を把握することができる。

ここでは、韓半島において細石器を保有する遺跡を石器組成と石材構成を基準とし分類した [1)]。石器組成においては細石核と細石刃の出土状況に注目し、細石核と細石刃が出土する遺跡、細石核のみ出土する遺跡、細石刃のみ出土する遺跡、また細石核と細石刃いずれも出土せず、細石核調整剥片のみ出土する遺跡など、細石核・細石刃の有無を基準として分類を行った。また石材利用の状況からは、複数の石材を利用する遺跡と単一の石材を利用する遺跡とに分けて観察した。特に石材の種類については、肉眼で分類可能であり原産地が限定される黒耀石と水晶をそれぞれ一つの分類項目としたほか、硅質頁岩・流紋岩・凝灰岩・ホルンフェルスなどの名目で報告されているものを‘頁岩系’、また韓半島において石器石材として最も頻繁に活用される石英・硅岩等を‘石英系’とし一つの項目にまとめ、合計 4 つの区分を設定した。

このように、細石核と細石刃の出土状況と石材構成を、細石核を基準として 1 ～ 3 類、細石刃を基準として A ～ C 類を設定し、これら細石核・細石刃の組成と石材利用状況の項目を互いに掛け合わせると、1A・1B・1C・2A・2B・2C・3A・3B・3C の 9 つに分類することができる (表 1)。

細石核と細石刃の両者を保有する遺跡では、複数石材から構成される 1A・1B・2A 類と、単一石材から構成される 2B 類との大きく二つに分けることができる。その中でも、細石核は複数石材からなるのに対し、細石刃は単一石材のみからなる 1B 類、また反対に細石核では単一の石材が用いられながらも細石刃では複数種類の石材から構成される 2A 類など、細石核と細石刃の石材構

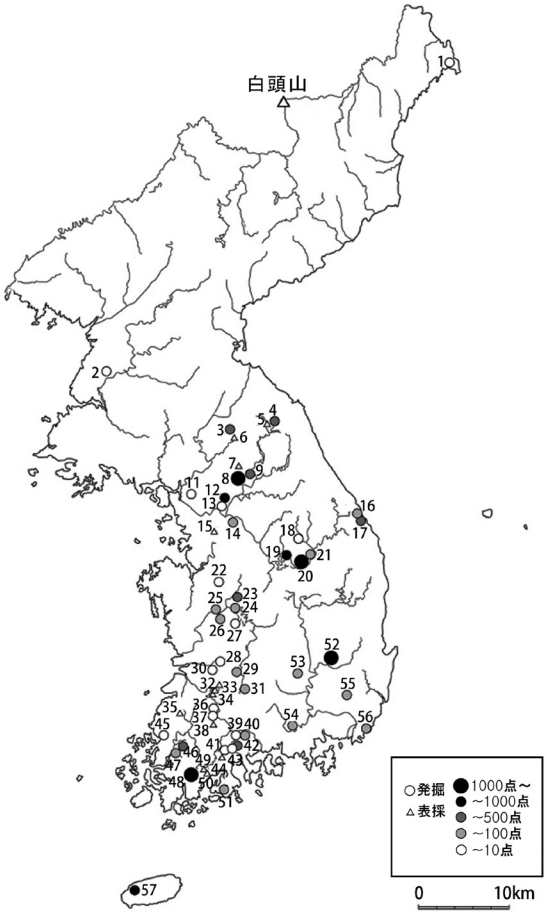

図 1　遺跡の分布状況

表 1　細石核と細石刃の組成と石材利用状況による分類

細石核＼細石刃	A : 複数石材の細石刃	B : 単一石材の細石刃	C : 細石刃不在
1 : 複数石材の細石核	1A：複数石材の細石核＋複数石材の細石刃	1B：複数石材の細石核＋単一石材の細石刃	1C：複数石材の細石核のみ
2 : 単一石材の細石核	2A：単一石材の細石核＋複数石材の細石刃	2B：単一石材の細石核＋単一石材の細石刃	2C：単一石材の細石核のみ
3：細石核不在	3A：複数石材の細石刃のみ	3B：単一石材の細石刃のみ	3C：細石核・細石刃不在 (細石核調整剥片のみ)

成が異なる状況が確認される。このような状況は細石核あるいは細石刃が存在しない遺跡においても見られ、複数石材から構成される細石核または細石刃を保有する1C・3A 類と、単一石材から構成される細石核または細石刃を持つ 2C・3B 類に分類される。その他、細石核・細石刃両者全てが伴わず、細石核打面または作業面再生剥片などの調整剥片のみが確認される遺跡も細石器遺跡における工程の一部分として 3C 類を設定した。

遺跡の分布状況を類別に見てみると、複数石材から構成される 1A 類の遺跡が韓半島中央部にやや集中していることがわかる (図 1)。一方、単一石材から構成される 2B 類は南西部地域に比較的まとまった傾向が確認されるが、全体的に各分類での偏りはそれほど大きくないことがわかる。次に分類ごとの遺跡の様相と石器・石材組成を見ていきたい (表 2、図 2)。

1. 1 類

1A 類では多様な石材構成がみとめられるが、特に黒耀石の利用頻度が高い点で共通する。細石核・細石刃共に同一の石材を用いる遺跡が多い中、東海基谷遺跡 B 地区では細石刃で用いられている黒耀石が、細石核には利用されていない。また下花渓里 I 遺跡 1 地区では、細石核に用いられた頁岩系石材が細石刃では確認されていない。同様に下花渓里Ⅲ遺跡では細石核で見られる石英系・水晶などの石材が細石刃に利用されていない。このように一遺跡における細石核と細石刃の組み合わせは多様であり、両者は必ずしも同じ石材構成を示すもので

表 2　分類ごとの遺跡の様相

細石核＼細石刃	番号	A : 複数石材からなる細石刃	番号	B : 単一石材からなる細石刃	番号	C : 細石刃不在
1 : 複数石材の細石核	8	下花溪里 I (1 地区)	3	長興里	2	萬達里
	10	下花溪里Ⅲ	42	月坪	40	曲川 (8 文化層)
	12	好坪洞 1 地域				
	17	基谷 B 地区				
	20	垂楊介 I 地区				
	25	石壯里				
	48	新北				
2 : 単一石材の細石核	9	下花溪里 I (100 地区)	11	民楽洞	1	屈浦里
	13	好坪洞 2 地域	21	垂楊介Ⅲ地区	5	上舞龍里 II
	46	大田	24	老山 2 地点	7	ドルトゴリ※
	52	月城洞	26	老隠洞 B-1 地区	15	坪倉里※
			28	新幕	18	頭鶴洞
			29	ジングヌル (下段)	22	清堂洞
			30	沙根里	27	大井洞
			41	竹山	32	下加※
			53	壬佛里	33	グジョンゴル※
			56	中洞	34	瑟峙里※
			57	高山里	35	密登※
					37	松田里
					38	下青丹※
					44	錦城※
					45	堂下山
					47	沙倉
					49	東顧枝※
					50	龍沼※
					51	寒洞
					54	集賢
					55	古禮里
3：細石核不在	16	基谷 A 地区	4	上舞龍里 I	19	チャンネ C 地区
	31	砧谷里	6	軍炭里※	23	セムゴル
			14	三里 5 地区	36	舟山里
			39	曲川 (9 文化層)		
			43	金坪		

類型	遺跡名	黒耀石	水　晶	頁岩系	石英系
1A	好坪堂 1 地区				
	下花渓里 I 1 地区				
1B	月坪				
	長興里				
1C	萬達里				
	曲川 8 文化層				
2A	下花渓里 I 100 地区				
	月城洞				
2B	民楽洞				
	老隠洞				
2C	頭鶴洞				
	堂下山				
3A	砧谷里				
3B	上舞龍里				
	三里				
3C	セムゴル				
	舟山里				

図 2　分類ごとの石器・石材組成

0　5cm

はないことがわかる。

1B 類を見てみると、長興里遺跡では黒耀石製細石核と頁岩系細石核が出土したが細石刃は全て黒耀石を利用したものであり、頁岩系の細石刃は出土していない。また月坪遺跡でも頁岩系細石核と水晶製細石核が確認されているが、細石刃は全て頁岩系石材から構成される。一方、各遺跡において細石刃が伴わない細石核には同一石材の剥片・砕片なども出土していることから、小規模ながらも作業が展開されたことがわかる。また全体の石材構成ではどの遺跡でも石英系石材の割合が高いが、細石核・細石刃には利用されていない点で共通している。

1C 類を見ると、萬達里遺跡では黒耀石製細石核 7 点のほか石英系石材の細石核が 1 点出土している。曲川遺跡 8 文化層では石英系と頁岩系石材の細石核が 1 点ずつ確認されているほか、頁岩系石材の細石核打面再生剥片が 2 点共伴する点で注目される。

そのほか共伴する石器の組成を比較してみると、多くの遺跡で大量の削器・掻器・彫器が伴うことがみとめられる。特に 1A 類の下花渓里 I 遺跡 1 地区では削器・彫器が集中的に出土していることがわかる。石材は石英系石材を主体とする遺跡が多いが、利用石材の一部には細石核・細石刃に用いられた黒耀石・頁岩系・水晶などが含まれる場合が殆どである。

1B 類における削器・掻器・彫器の様相を見てみると、月坪遺跡では削器・掻器が石英系石材を主としているのに対し、彫器では細石刃と同様の頁岩系石材が利用される。一方、長興里遺跡では彫器が全て石英系石材から構成されているのに比べ、削器・掻器は細石刃と同じ黒耀石が利用されている。また出土数量を比較すると、月坪遺跡では削器より掻器の数量が多いのに対し、長興里遺跡では削器が圧倒的に高い比率を占めており、各遺跡で組成が大きく異なることが確認された。

1C 類では、曲川遺跡において削器・掻器・彫器が数量ずつ確認されているが、全て石英系石材から構成されており、細石核とは石材を異にしている。

2.　2 類

2A 類では、下花渓里 I (100 地区) 遺跡において黒耀石製の細石核・細石刃を主体としているほか、細石核では用いられていない水晶・頁岩系・石英系石材の細石刃が共伴する。また好坪洞遺跡 2 地区では石英系細石核・細石刃のほか、黒耀石、頁岩系石材を用いた細石刃が共伴しており、月城洞遺跡では頁岩系石材の細石核・細石刃と共に黒耀石製細石刃が確認されるなど、細石刃において多様な石材構成を示す。一方大田遺跡では、細石核は頁岩製石材のみから構成されるのに対し、細石刃は石英系石材を主体としている点で他の遺跡と異なる。

2B 類では他の類に比べて遺跡数が多いが、各遺跡で出土した細石核・細石刃の数量は高山里遺跡を除くと少量に過ぎない。民楽洞遺跡で黒耀石製細石核・細石刃が出土しているほか、全ての遺跡が頁岩系石材から構成されている。

2C 類では殆どの遺跡で細石核の出土量が少なく、大田洞・清堂洞・頭鶴洞・上舞龍里 II 遺跡では単独で出土した。また松田里・沙倉・寒洞・集賢遺跡では細石核打面・作業面再生剥片が確認されている。多くの遺跡で頁岩製石材を利用している中、頭鶴洞遺跡ではチャート製の細石核が出土している。

そのほかの石器を観察すると、次のような結果である。

2A 類における削器・掻器・彫器の組成を見てみると、月城洞遺跡では彫器、下花渓里 I 遺跡 (100 地区) では削器が集中的に出土しており、組成に偏りがあることがわかる。

2B 類では削器・掻器・彫器の数量も少なく、特に彫器は老隠洞・新幕・高山里遺跡からのみ確認された。その中で老隠洞遺跡では比較的まとまった量の彫器が出土しているが、全て細石刃と同様の頁岩系石材が利用されている。

2C 類における削器・掻器・彫器では、細石核と同様の石材が多く用いられているが、上舞龍里 II 遺跡では細石核で利用された頁岩系石材が確認されておらず、また頭鶴洞遺跡では彫器に頁岩系石材、削器に石英系石材が用いられるなど、多様な石材構成が確認された。

3.　3 類

細石刃が伴わない 3 類では石英系石材を主とする遺跡が多い。一方上舞龍里 I 遺跡はすべて黒耀石で構成され、また舟山里遺跡は頁岩系石材が 9 割以上を占めるなど、石英系以外の石材を主体とする遺跡もみとめられる。

3A 類の石器・石材組成を見てみると、基谷 A 遺跡では細石刃 2 点が出土し、頁岩系と石英系石材各 1 点から構成される。砧谷里遺跡では 10 点の細石刃中、頁岩系 5 点・石英系 3 点・水晶 2 点からなり、様々な石材が用いられていることがわかる。

3B 類では三里・上舞龍里 I 遺跡で黒耀石を主体とし、曲川遺跡 9 文化層で石英系石材、金坪遺跡では頁岩系石材を中心としている。その中で、黒耀石を利用する三

里・上舞龍里Ⅰ遺跡ではまとまった数量の細石刃が出土している。

3C 類では全ての遺跡で細石核打面再生剥片が 1 点ずつ確認されており、石材も全て頁岩系石材から構成される点で共通する。

その他の器種では、3A 類の削器・掻器・彫器の組成に注目すると、両遺跡では削器の出土量が卓越しているが彫器が少ない点で共通している。また削器の一部には頁岩系石材が利用されている点でも類似する。

3B 類を見てみると、金坪遺跡では削器が出土していないが、掻器・彫器は全て細石刃と同様に頁岩系石材から構成されている。一方上舞龍里Ⅰ・三里遺跡では全ての彫器と削器の一部が細石刃と同じ黒耀石から構成されるのに対し、削器の大半と全ての掻器は主に石英系石材が用いられており、遺跡ごとに大きく異なる傾向が確認された。

3C 類を見てみると、セムゴル遺跡では削器を中心として多くの掻器・彫器が出土しているが、その多くが石英製石材からなり、細石核調整剥片とは石材を異にしている。一方舟山里遺跡では掻器 3 点のみが確認されているが、全て細石核調整剥片と同様の頁岩系石材から構成される。

このように同じ類内でも遺跡ごとに石器・石材構成に違いがあらわれた。特に細石核・細石刃製作とそれ以外の削器・掻器・彫器などの石器類の製作が互いに関連する遺跡と、ほぼ別系統で進行される遺跡があることが確認される。

分析結果

各遺跡における石器組成と石材構成は、分類ごとに特徴を持ち、大きく異なることが確認された。それらの特徴をもとに遺跡で行われた作業工程を推考・復元してみたい。

まず複数石材の細石核・細石刃から構成される 1A 類では、多様な個体を用い細石核原形製作から細石刃剥離までの一連の工程が行われた痕跡を残す遺跡が多い。特に垂楊介Ⅰ・好坪洞遺跡 1 地区などからは細石核打面・作業面再生剥片など細石核調整剥片も一定量出土していることから、細石核の調整を頻繁に行いながら作業を進行していく過程が窺える。また各遺跡では石材組成に偏りがあり、主体となる石材を基本としそのほか複数の石材を補完的に利用していたものと推察される。

複数石材の細石核と単一石材の細石刃を保有する 1B 類では、細石刃を伴う細石核と細石刃を伴わない細石核が共伴している。前者では細石核の調整から細石刃剥離までの過程が行われたことがわかるが、後者では細石刃製作まで至らなかった可能性が高い。一方、細石刃が伴わない細石核と同一石材から構成された剥片・砕片以外にも、削器などの石器類が僅かながらも確認されていることから、細石刃製作以外に細石核調整、削器製作などの作業が行われていたものと推察される。しかし細石核の形態から見ると、両者共に作業が進行した形で廃棄されたものが多く、ほぼ作業の終了段階に該当するものであると考えられる。

複数石材の細石核のみを保有する 1C 遺跡では、細石核のほか伴う資料が多くないことから、作業を明確に復元することは難しい。こうした中、曲川遺跡 8 文化層では細石核打面再生剥片 2 点が確認されていることから、細石核調整が行われたと判断される。ただし遺跡から出土した細石核とは異なる個体である可能性が大きく、細石刃が伴わないことからも、石核調整を施した後には細石刃剥離が行われないまま遺跡外に搬出された可能性も考えられる。また、これら細石器関連遺物とは異なる石材による削器・掻器などの石器類が共伴することから、細石刃製作とは別途に作業が進行されたものと推定される。

単一石材の細石核と複数石材の細石刃を保有する 2A 類では、主に細石核と同一石材の個体において一連の細石刃剥離作業が行われたものと推察される。特に大田遺跡では細石刃剥離以前の細石核原形が確認されており、細石核原形製作から細石刃製作に至る過程を復元することができる。一方、細石核を伴わない細石刃は遺跡外から搬入された可能性が高く、使用後そのまま廃棄されたものと思われる。

単一石材の細石核と細石刃から構成される 2B 類では、細石核調整から細石刃剥離までの一連の過程が遺跡内で行われたものと思われる。しかし全体の石器構成からみると、複数石材の細石核または細石刃を伴う 1A・2A 類よりは比較的小規模に作業が展開したと推察することができる。一方、細石刃と比べて細石核の出土量が多い老山・ジングヌル・中洞遺跡などでは集中的に細石刃製作が行われた後、細石核と細石刃の一部が搬出された可能性が高い。

単一石材の細石核のみから構成される 2C 類ではいくつかの仮説を立てることができる。まず、細石核と共に細石核打面再生剥片など細石核調整剥片が伴う遺跡では

細石刃製作が展開した痕跡がみとめられないことから、石核調整後の細石核はそのまま遺跡外に搬出され、残りの細石核については遺跡内で廃棄されたものと推察される。また細石核調整剥片を伴わず、細石核が単独で出土した遺跡においては、細石核が遺跡に搬入されたが作業が展開しないまま廃棄されたと考えられる。これらの遺跡の多くは出土量も少なく，まとまった作業の痕跡がみとめられないことから、一時的に利用された可能性が高い。

複数石材の細石刃のみを保有する 3A 類においても、細石核調整剥片の有無から 2 つに分けて推察することができる。細石核調整剥片が伴う遺跡では、細石核が遺跡内に搬入され石核調整が施された後、細石刃製作が行われた可能性が高い。しかしある程度作業が進行した段階で、細石刃の一部と細石核が遺跡外に搬出されたと考えられる。反対に、細石核の調整剥片が確認されていない遺跡では、細石刃のみ搬入された可能性が高いが、細石刃の数量が極端に少ないことから、同時に搬入された細石刃の一部は遺跡外に搬出されたという仮説を立てることもできる。

単一石材の細石刃のみを保有する 3B 類の遺跡では、細石核調整剥片なども確認されていない。また細石刃と同一石材からなる削器・掻器・彫器なども共伴することから、細石刃と共に搬入された可能性が窺える。またそれらの石器の中には、細石器製作とは異なる石材のものも含まれている。

細石核と細石刃が伴わず、細石核調整剥片のみを保有する 3C 類では、細石核が遺跡内に搬入されたのち細石核打面を中心に調整が施されたが、細石刃製作を行わないまま遺跡外に搬出されたと判断することができる。細石核調整と共に削器・掻器など各種石器の製作も進行されたが、遺跡ごとに利用石材に違いがあることが特徴的である。細石核調整剥片と同一石材から構成される削器などの石器類、また剥片・砕片を保有する遺跡と、細石核調整剥片とは異なる石材の石器類を主とする遺跡とでは、石材の利用状況に差異が現れた。

考　　察

韓半島における細石器製作では各類で異なった作業工程パターンが存在することが確認された。これら各類の出土状況から、一連の細石器製作の作業工程を復元する。

まず Ⅰ：細石核原形作成、Ⅱ：細石核打面準備、Ⅲ：細石刃製作からなる 3 つの製作工程と、Ⅳ：細石器の使用または廃棄を含む、4 つの段階に分けることができる。特に第Ⅳ段階ではⅣ a：細石核の廃棄と、Ⅳ b：細石刃の使用・廃棄とに細分可能である。しかしこれらの段階は必ずしも全てが順番に行われるのではなく、個体の状況によって省略または反復されることもある。例えば第Ⅱ段階の細石核打面準備は第Ⅲ段階の細石刃製作の途中で打面再生という形で行われるときもあり、また素材の段階で細石刃製作に適当な平坦面を持つ個体では初めから第Ⅱ段階を省略する場合もある。また、第Ⅰ段階の前に素材となる原石を獲得する段階が考えられるが、遺跡内で明確な状況が確認されないため、ここでは第Ⅰ段階に包括されるものとして捉えておきたい。

このように個体ごとで作業工程に違いがあり、各個体の状況によって柔軟に変化することがみとめられる。これら一連の作業工程が確認される遺跡は少ないことから、全工程が必ずしも一遺跡において行われるのではなく、幾つかの遺跡にわたって分散され進行されたことがわかる。

以上のような傾向は、細石器製作の一連の肯定が遺跡間を連結しながら行われたことを示しており、特に細石核と細石刃はそれぞれ個体を異にし、様々な組み合わせで作業が展開されたものと考えられる。言い換えると、各個体によって作業に段階差が存在し、一遺跡において行われる作業単位は各遺跡で異なることが推察される。

このように、細石器製作の作業工程は全ての遺跡において一貫しているが、各遺跡で進行された作業には個体ごとに段階差が存在することを意味している。即ち、幾つかの段階にわたり作業が行われた複合的な遺跡構造と、ある段階の作業のみが切り取られた形で行われた単位的な遺跡構造が共に細石器石器群を構成するものと考えられる。特に前者では複数石材から構成される 1A・1B・1C・2A・3A 類において多く、後者は単一石材から構成される 2B・2C・3B・3C 類の遺跡で確認される。これは各遺跡において作業が集中または分散するという偏在性を持つためであり、一連の作業工程が異なる時空間的範囲で一定の単位をもとに開始・終了されることを意味しているものと判断される。

おわりに

細石核と細石刃の石器組成と石材利用の状況を中心に比較してみると、各遺跡で比率差が見られることと共に多様な組み合わせが確認された。これらは遺跡内で行われた作業と共に細石核・細石刃の搬入・搬出を通して遺

跡間の作業連関が存在する事を意味している。

このように細石器遺跡において見られる遺跡間の連鎖関係は、移動生活と共に石器製作・使用・廃棄にいたる一連の作業工程が段階的に行われたことを示すものとして理解される。移動パターンにもとづいて作業が進行されたのか、あるいは石器製作作業にもとづいて移動パターンに差異が現れるのか、両者の因果関係を明確に位置づけることは困難であるが、深い関連性が存在することを疑う余地はないであろう。

本論では韓半島における細石器遺跡を細石核と細石刃に焦点を当てた石器組成と石材構成の関係を中心として分類し、各遺跡において行われた作業工程を概観してきた。しかし今後各石器群の性格を解析する上で、石器一つ一つのより細かな属性観察と分類、また分布・接合状況など、総合的な検討が必要であることは言うまでもない。それらをもとに、遺跡内における個体単位の作業工程の特定と遺跡間の関係を時空間的に立体化して考える研究体制を整えていかなければならない。

謝　辞

本研究の遂行にあたり、財団法人三島海雲記念財団より学術奨励金を賜りました。末筆ながら篤く感謝申し上げます。

参考文献

1）成春澤「細石刃製作技術と細石器」『韓国考古学報』38，pp.27 ～ 61，韓国考古学会，1998.

2）成春澤「細石器伝統の進化試論」『科技考古研究』6，pp.7 ～ 29，亜州大学校博物館，2000.

3）李隆助「丹陽垂楊介後期旧石器時代の舟形石器の研究」『古文化』35 pp.3 ～ 77，1989.

4）李憲宗「東北アジア細形石刃文化の起源問題に対する試考」『博物館年報』5，pp.9 ～ 31，木浦大学校博物館，1997.

5）李憲宗「我国細形石刃文化の編年，その上限と下限」『嶺南地方の旧石器文化』第 8 回嶺南考古学会学術発表会，pp.97 ～ 120、嶺南考古学会，1999.

6）張龍俊「韓半島出土細石核の編年」『韓国考古学報』48　pp.5 ～ 33，韓国考古学会，2002.

7）張龍俊『韓国後期旧石器の製作技法と編年研究』釜山大学校博士学位請求論文，2006.

8）安蒜政雄「砂川遺跡についての一考察―個体別資料による石器群の構造的な研究―」『史館』2，pp.1 ～ 18，史館同人，1974.

9）安蒜政雄「砂川遺跡についての一考察―個体別資料による石器群の構造的な研究 (2)―」『史館』9，pp.12 ～ 20，史館同人，1977.

10）安蒜政雄「日本の細石核」『駿台史学』47，pp.152 ～ 183，駿台史学会，1979.

11）安蒜政雄「環日本海旧石器文化回廊とオブシディアン・ロード」『駿台史学』135 号，pp.147 ～ 167，駿台史学会，2009.

12）大谷　薫「韓半島の細石器文化」『旧石器考古学』73 号，pp.1 ～ 12，旧石器文化談話会，2010.

13）小畑弘己「朝鮮半島の細石刃文化」『シンポジウム日本の細石刃文化Ⅱ』，pp.210 ～ 231，八ヶ岳旧石器研究グループ，2003.

14）小畑弘己『極東及び環日本海における更新世 - 完新世の狩猟道具の変遷研究』平成 14 年度～平成 15 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)(2) 研究成果報告書，2005.

15）金尚泰 / 大谷薫訳「韓半島細石刃石器群研究の成果と展望」『旧石器考古学』72，pp.41 ～ 48，旧石器文化談話会、2009.

16）佐藤宏之「環日本海における広郷型細石刃核の分布」『内蒙古細石器文化の研究』平成 10 年度～平成 13 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)(2) 研究成果報告書　pp.160 ～ 168，2002.

17）鶴丸俊明・出穂雅実・高倉純「大韓民国・上舞龍里Ⅱ遺跡の細石刃石器群―石器群の位置づけと関連する問題について―」『北海道考古学』36 集，pp.97 ～ 103，2000.

18）Jochim.M.A,.Optimization and stone tool studies: problems and potentials. In r. Torrence(ed.). *Time, energy and stone tools*. Cambridge Univ. 1989.

19）N.D.prasolov, Structure of Houses and Settlements of the Late Paleolithic period in Eastern Europe. *The Origin and Dispersal of Microblade Industry in Northern Eurasia*, pp.5-10，1992.

20）Shiffer,M.B, Archaeological Context and Systemic Context. *American Antiquity*, vol.46,pp156-165，1972.